

女子大学生における死の不安および 人格的発達におよぼす死別経験の効果

— 東日本大震災の経験を通して —

Effects of Breavement on Death Anxiety and Personality Development in Female University Students

— Through the Experience of East Japan Great Earthquake Disaster —

増 田 公 男

Kimio MASUDA

序 論

人間が一生のうち経験するライフイベントのなかで、身近な人との死別経験は人々に大きな悲嘆を与える。対象が身近な人、なかでも配偶者、両親や子どもなどの場合、悲嘆の程度はいかばかりであろうか。遺族、残された人々への影響を検討する場合には、死別対象との関係や直接的な関わりの有無、感情や死別してからの期間などさまざまな要素が関与し、極めて個人的なことがらである。とりわけ生前の関わりとの程度とは強い関係があり、親密な関係にある同居家族で臨終に立ち会った場合には、悲嘆の程度はさらに強くなることが想像される。宮城県牡鹿半島東南東沖130km、仙台市東方沖70kmの太平洋の海底を震源とする、2011年3月11日に発生した「東日本大震災」は、国民に大きな悲しみをもたらすと同時に、自然災害による「生」のはかなさや「死」が決して遠い存在ではないことを思い知らせた。

死別は前述のように個人的なことがらであるが、死別に至るまでの経緯によって、残されたもの、遺族の心理的負担は異なるこ

とが知られている。死の形態には老衰、慢性疾患や重度のガンのように遺族にとってある程度死期を予期でき、それまで漠然としていた死というものと対峙する機会を与えられた場合と、今回の震災や事故、自殺など予測することが困難な場合がある。後者、すなわち遺族にとって突然の別離を余儀なくされた場合は、前者と比べ身体的・心理的負担は大きい可能性がある。以前から坂口（2010）にも示されているように必ずしも一貫した結果が得られたわけではないが、宮林ら（2008）の調査では、自殺や事故死は病死に比べてうつ傾向、悲嘆等が高く、健康度が低くなっており、Miyabayashi（2007）でも自殺、事故や急病の発生による予期しない死が、残されたものに健康状態の悪化につながることを明らかにされている。このように一般的に唐突な死別による場合は、回復には時間を要するだけでなく容易でもないという（Demi,1978;Lehman,1987など）。大和田（2000）による死に直面した残されたものの心理についての研究を概観した報告によれば、全体としては死の形態による差はないとして

いるが、突然の死には現実感のなさ（Range et al, 1990）、悲しみの深さ・抑うつ感の強さ（Shanfield et al., 1987）などの特徴があるという。

死別直後の悲嘆からの回復過程については、段階モデルが提案され様々な研究がなされている。Bowlby et.al. (1970) による無感覚と不信の段階、思慕と探求の段階、混乱と絶望の段階、再建の段階の4段階モデルやデーケン (1986) の12段階モデルなどがある。最もよく知られているモデルの一つにKübler-Ross (1969) の末期患者へのインタビューをもとに、作成された予測可能な5段階説である。第1段階は、大きなショックから現実を受けられない「否認」の段階で、第2段階は自らが直面する死への「怒り」である。死の定めから逃れ得ないという認識をもつが、何らかの救いを求めるのが第3段階の「取り引き」で、その後、それが思惑通りにならないことによる無力感を抱き、失望することにより「抑うつ」という第4段階になる。そして、感情は安定し安らかに死を受け入れる第5段階の「受容」に到達する。以上が、彼女の悲嘆のプロセスであるが、その後、こうしたモデルには批判もでている。そのひとつとしてBonanno (2009) は「極度の不利な状況に直面しても、正常な平衡状態を維持することができる能力」とレジリエンスを定義し、その観点からKübler-Rossの説を批判し、特に急性の死別についてレジリエンスの意義を強調した。

そして、死そのもののイメージや死別経験後の変化などのなかの肯定的な側面にも焦点が当てられるようになってきた。誰もが直面する重要な他者との死別について、長年にわたり研究の観点はその回復ないしその過程が中心であるが、成長感や次の段階への架橋となる研究（東村ら、2001など）もみられるようになった。渡邊ら (2005) は、死別によ

る人格発達に関する質問紙を作成し、広範囲の年齢層に渡る400名を超える対象からの死別による人格の発達とケア体験を中心に検討し、人格的発達が生起することおよびそれがケア体験と関係することを明らかにした。また、末松 (2008) は、渡邊らの尺度の人格的発達の簡易版を作成し、自然観に着目しその影響を「自己感覚の拡大」で確認した。前原ら (2008) も同様に渡邊らの尺度を使用し、死に関する情報から得た感動体験のあるものの方がいないものより人格的発達得点（合計）が高くなったことを明らかにした。このように、死別経験や死の意識の肯定的側面と人格発達の関係についてのアプローチもしだいに増えてきている。

本研究の目的は以下の通りである。

東海地方に居住する調査対象である女子大学生が、東日本大震災を経験することによって死をどの程度身近に感じたか。また、今回の対象が大学生女子に限定されるため、既存の「死の不安」尺度（Temper, 1970）の因子分析を試みるとともに、不安と死の身近さの程度との関係を調査したい。後者に関しては、身近さは死の不安と正の関係にあり、死別経験を有するものは不安が低くなるのではないかと予測する。

また、前述のように死別経験による人格の発達が期待されることから、両者の関係を明らかにしたい。さらに、調査対象の年齢や観点が異なるため、ここで用いた死別による人格的発達に関する質問紙（渡邊ら、2005）の因子構造を再分析したい。死別経験については、調査対象のこれまでの日常生活のなかでの重要な他者や親密なベットの間の死別体験の有無によって群を構成し、死別経験が人格発達に肯定的に影響するという観点から統計的検討を実施した。

方 法

(1) 調査協力者および調査時期

調査対象は、名古屋市内の女子大学の大学生1、2年生141名であり、2011年7月に実施した。平均年齢は18.6歳であった。なお、手続きに示す理由によって1名が除かれ、最終的な対象は140名であった。

(2) 調査内容と手続き

本研究で使用した調査用紙は、以下のように構成されていた。まず、調査年（2011年）の3月11日に発生した「東日本大震災」を経験することによる「死の身近さ」の程度（4件法）を評定させた。以下のような内容の質問を通して、倫理的な配慮としての手続きを行った。すなわち、「死」というテーマであるため、考えたくないあるいは答えることが困難という場合は、回答を留保することができる選択肢を質問項目として準備した。その結果、1名がこれ以降の回答を留保したため分析の対象から除き、分析対象は調査協力者に示した140名となった。

つぎに「死の不安尺度」(Death Anxiety Scale, 以下DAS; Templer, 1970)について回答を求めた。本質問紙は15項目から成り立っており、本来は2件法で回答を求めているが、ここでは4件法で実施した（以下DAS; 逆転項目が6項目あり、分析は修正後の得点で実施し結果での表記も同様である）。その後、重要な他者と可愛がっていた動物（ペット）についての死別経験について、それぞれの死別経験の有無についての選択肢を設けた。

最後に渡邉ら（2005）による32項目からなる「死別経験による人格的発達」について、5件法で回答を求めた。なお、死別経験のない場合は、重要な他者との死別経験を想定して、質問に答えるよう依頼した。

結果と考察

(1) 東日本大震災による死の身近さの捉え方

東日本大震災を東海地域で経験した学生たちは、その後の報道等を含め死についてどのように感じたか調べた。「死を身近に感じた」ものは21.4%、「死をやや身近に感じた」ものが48.6%で、約7割が身近に感じ、「死を身近に感じなかった」もの（8.6%）と「死をあまり身近に感じなかった」もの（21.4%）の2倍以上になっていた（表1）。多くのものがこの地震によって死を身近に感じたが、強く感じたものは約2割にとどまった。揺れ等による実体験や直後からのマスコミ等を中心とした報道を通して、死の身近さを感じたが、現実の自らの死の感覚として自覚するまでには至らないものも少なくなかった。約3割のものは、東日本大震災と今後発生が予測されている東海地域での地震や津波等による大きな被害や多くの死者の発生の懸念を、自らの死の切迫感とは区別していたようである。

表1 東日本大震災により死をどのように感じたか (%)

身近	やや身近	あまり 身近でない	身近でない
21.4	48.6	21.4	8.6

同時期に実施された福祉系大学生を対象とした報告（村上ら，2012）では、大震災以降に死について考えるようになったというものが82.2%（無回答を除き再計算）に達していた。

また、成人男女を対象として、愛知県防災局（2012）が震災の約10ヶ月後に実施した調査では、より具体的な「自宅での自分自身の安全」（死の危険、大けがのおそれ）の観点からの質問への回答に比べて高くなっていた。この調査では、一般成人男女が対象となっており、死の危険と大けがのおそれを合わせた値が60.2%（無回答を除き再計算）で今回

の調査より低かった。直接比較することはできないが、本調査対象が女子に限定されており、これまでの諸研究では一般的に女性の方が死への不安が高いとされており (松下ら, 2008; 金児, 1994; Pollark, 1980 など), これには性差が影響しているのかも知れない。一般的には東日本大震災によって、実質的な被害がなくても多くの人々は死ということがらを考える契機になったようである。

(2) 「死の不安」尺度 (DAS) の因子分析および震災による死の身近さの感じ方と死別経験の「死の不安」への影響

今回用いたDASについて2から6の因子分析を行い、表2に掲載したように最適解が4因子で得られた。第1因子は「恐れ」に関する因子 (因子寄与率17.5%) で「死ぬことは全然恐くない (逆転項目)」, 「私にとって将来恐れることは何もないと感じている (逆転

項目)」など4項目であった。第2因子は、「具体性を伴う死」に関する因子 (同, 16.6%) で「手術を受けなければならないと考えることはこわい」, 「死体を見ることはおそろしい」など4項目であった。第3因子は、「死についての心配や悩み」に関する因子 (同, 13.8%) で「死について悩まされることはまったくない (逆転項目)」, 「死後の『生』に関する問題が私を迷わせる」など5項目で、第4因子は、「私はしばしば人生はあまりにも短いと思う」など「時間経過の速さ」に関する2項目 (同, 10.5%) から成り立っていた。第2から第4の3因子は α 係数が、.5を少し上回る程度でやや低くなっていた。

東日本大震災で死をどのように感じたか、また重要な他者との死別経験が、日頃の死への不安の程度によって異なるのではないかという予測にもとづき、前述の大震災で死を身

表2 死の不安尺度 (DAS) の因子分析の結果

質 問 項 目	I	II	III	IV	共通性
Q6 ガンになることはあまりこわくない。*	.815	.163	.101	-.133	0.719
Q5 死ぬことは全然こわくない。*	.802	.506	.208	-.091	0.951
Q15 私にとって将来恐れることは何もないと感じている。*	.585	.167	-.062	.224	0.425
Q1 死ぬのがとてもこわい。	.555	.663	.173	.048	0.780
Q4 手術を受けなければならないと考えることはこわい。	.178	.653	.133	.089	0.483
Q9 苦痛の多い死に方をするのがこわい。	.198	.640	-.014	.128	0.465
Q13 人びとが戦争について話しているのを聞くと、ぞっとする。	.145	.591	.421	-.166	0.575
Q14 死体見ることはおそろしい。	.261	.573	.040	-.358	0.526
Q7 死についての考えに悩まされることはまったくない。*	.398	-.027	.661	.231	0.651
Q3 人が死について話していてもとくに気にならない。*	.572	.196	.607	-.155	0.758
Q10 死後の「生」に関する問題が私を迷わせる。	-.089	.124	.601	.192	0.421
Q11 心臓発作を起こさないかととても心配である。	.005	.144	.569	.038	0.346
Q2 死についての考えはめったに浮かんでこない。*	.019	-.388	.480	.145	0.402
Q8 時間があまりに速くたつので悲しいと思うことがよくある。	.069	.065	.101	.796	0.653
Q12 私はしばしば人生はあまりに短いと思う。	-.008	-.022	.227	.734	0.590
因子寄与	2.618	2.494	2.065	1.567	8.744
因子寄与率 (%)	17.46	16.63	13.77	10.45	58.30

*は逆転項目(逆転採点後)
プロマックス回転後

因子間相関

	I	II	III	IV
I	1.000	.302	.232	-.031
II	.302	1.000	.105	-.087
III	.232	.105	1.000	.066
IV	-.031	-.087	.066	1.000

近に感じたか否か（「感じた」と「やや感じた」を合わせた98名と「感じなかったとあまり感じなかった」とを合わせた42名の2群に分けた）と死別経験の有無（あるもの88名、ないもの52名）によって、死への不安に差異があるかを検討した。身近さは不安と正の関

係にあり、死別経験を有するものは不安が低くなるのではないかという予測のもとに分析した。合計得点、各因子と各質問項目ごとに、2要因分散分析を実施し、有意ないしは有意な傾向のあった因子、項目等について表3に掲載した。

表3 死別経験と地震経験での死の身近さによる死の不安得点と標準偏差
（各因子と統計的に有意でないしは傾向のあったもの）

○死の不安の合計点

	重要な他者との死別経験				
	あり(a)		なし(b)		
地震による死の身近さ	平均	SD	平均	SD	分散分析
身近(x)	44.26	0.63	44.72	0.91	y>x
身近でない(y)	45.50	1.09	46.30	1.15	p<.10

○第1因子－恐れに関する因子

	あり(a)		なし(b)		分散分析
	平均	SD	平均	SD	
地震による死の身近さ					
身近(x)	10.70	0.20	10.75	0.29	
身近でない(y)	10.64	0.35	10.90	0.36	

○第2因子－具体性を伴う死に関する因子

	あり(a)		なし(b)		分散分析
	平均	SD	平均	SD	
地震による死の身近さ					b>a p<.10
身近(x)	16.50	2.75	17.28	2.26	
身近でない(y)	16.73	2.00	17.30	1.92	

○第3因子－死についての心配や悩みに関する因子

	あり(a)		なし(b)		分散分析
	平均	SD	平均	SD	
地震による死の身近さ					y>x p<.05
身近(x)	12.02	0.32	11.63	0.46	
身近でない(y)	12.70	0.55	12.70	0.58	

○第4因子－時間経過の速さに関する因子

	あり(a)		なし(b)		分散分析
	平均	SD	平均	SD	
地震による死の身近さ					y>x p<.10
身近(x)	5.05	0.18	5.06	0.26	
身近でない(y)	5.46	0.32	5.40	0.33	

○Q3－人が死について話していてもとくに気にならない。

	あり(a)		なし(b)		分散分析
	平均	SD	平均	SD	
地震による死の身近さ					y>x p<.10
身近(x)	2.92	0.09	2.72	0.14	
身近でない(y)	3.05	0.16	3.05	0.17	

○Q7－死についての考えに悩まされることはまったくない。

地震による死の身近さ	あり(a)		なし(b)		分散分析
	平均	SD	平均	SD	
身近(x)	2.77	0.11	2.44	0.16	y>x
身近でない(y)	2.96	0.19	2.95	0.20	p<.10

○Q9－苦痛の多い死に方をするのがこわい。

地震による死の身近さ	あり(a)		なし(b)		分散分析
	平均	SD	平均	SD	
身近(x)	3.65	0.71	3.88	0.10	x>y
身近でない(y)	3.59	0.12	3.55	0.13	p<.05

○Q11－心臓発作を起こさないかととても心配である。

地震による死の身近さ	あり(a)		なし(b)		分散分析
	平均	SD	平均	SD	
身近(x)	1.83	0.11	1.84	0.16	y>x
身近でない(y)	2.14	0.19	2.15	0.20	p<.05

その結果、身近さの要因については、第3因子で要因の効果が ($F=3.23, df=1/136, p<.05$), 合計スコアと第4因子において傾向がみられた ($F=2.13, p<.10, df=1/136$ と $F=1.76, p<.10, df=1/136$)。いずれも身近に感じたものの方が、死の不安得点が低くなっていた。項目ごとの差異については身近さの程度において、「人が死について話していてもとくに気にならない (Q3)」、「死についての考えに悩まされることはまったくない (Q7)」、「心臓発作を起こさないかととても心配である (Q11)」の3項目で身近なものの方が高くなっており、効果ないしは傾向が認められ、いずれも身近に感じたものの方が低かった（順に、Q3－ $F=2.49, df=1/136, p<.10$ ；Q7－ $F=4.31, df=1/136, p<.05$ ；Q11－ $F=3.22, df=1/136, p<.05$ ）。これらの3項目とは反対に「苦痛の多い死に方をするのがこわい (Q9)」では、身近に感じたものの方が高かった (Q9－ $F=3.19, df=1/136, p<.05$)

死の不安とは、死が必ずしも迫っている状況でなくとも、自らの死に対する漠然とした怖れと考えることができる。死を身近なこと

と感じたものたちの方が、合計点と2つの因子だけでなくQ9を除いた項目ごとの比較でも、死への不安が低かったという結果は、予測とは反対の結果になった。大震災を経験した際に死を身近と感じるものの方が、普段から死への不安が高いというのが当初の仮説であった。身近に感じたものは平時には死への不安から回避し、死への不安が高いものは身近に感じないように抑制しているという結果の解釈には困難があるように思われる。

死別経験の要因の効果については、第2因子で傾向が認められ ($F=2.19, p<.10, df=1/136$)、死別経験のないものの方が高くなっていた。第2因子は、「具体性を伴う死」に関する因子であり、重要な他者との死別という具体的な死と向き合った経験のあるものの方が低かったことになる。このような第2因子での死別経験の効果は、松下ら (2009) が死への態度尺度を用いた研究での結果の解釈としてあげた「大切な者との死別経験があると、死のイメージパターンなど関係なく、人生に対して死は肯定的な作用を持つという認識が高い傾向があるかもしれない」(p.165)

と通じるところがある。つまり、ここでの結果は肯定的な作用が不安の低減につながった可能性を示唆した。

全体として死別経験は死への不安と関連が低かったが、自らにとって差し迫った死ではないが現実起こった具体的な震災という事象については、ある程度の不安との関係が推察された。この点について確認するために、身近さの程度とDASの各項目との相関を求めたが、「人びとが戦争について話しているのを聞くと、ぞっとする (Q13)」だけでしか有意な相関は認められなかった ($r=.157, p<.05$)。

死別経験と死への態度等の関係については、これまで一貫した結果はないという (尾方ら, 2012)。今回も関連性は明確ではなく、第2因子でのみ死別経験により不安の低減の傾向が示されていただけであった。死別経験は極めて個人的なことであり、本人のパーソナリティや対象との関係、死別からの期間などさまざまな要素があり、容易に一括にはできない。集団式の質問紙調査を用いる場合には、より詳細な基準を設ける必要がある。

(3) 死別経験による人格的発達項目の因子分析と人格発達

調査時点までの重要な他者および可愛がっていた動物との死別経験については、表4に示したように63%のものが他者との間に、半数以上が動物との間にそれぞれ死別を経験しており、両者とも経験した者も約40%になっていた。一方、いずれの対象とも死別経験のないものは20%にとどまった。大学生を対象として今回の調査より踏み込んで死者に直面する経験 (身近な人の死の立ち会い経験) を問うた、得丸ら (2006) の56%との間に大きな差はなかったが、臨終への立ち会いといったより具体的な設問形式であったら、本結果は低くなっていた可能性がある。また、糸島

(2005) による同世代に対する調査では死別経験者は66%で、この値とも近い数値であった。看護大学生 (1～4年生) を対象とした狩谷ら (2011) でも、重要な他者 (身近な人と家族) は66%と本結果と近く、ペットを合わせると86% (本調査79%) で、両者の死別経験のないものは14% (同, 21%) でも近似していた。これらの間の差異は、本調査が重要な他者という表現にとどめ、死別経験の対象や時期については設問項目を設定しなかったことで、直接的な関係は明らかではないことも影響しているであろう。

表4 重要な他者およびペットとの死別経験 (%)

	ペット あり	ペット なし
重要な他者 あり	38.6	24.2
重要な他者 なし	16.4	20.7

本調査で使用した渡邊ら (2005) による「死別経験による人格的発達項目」は、調査対象の年齢、性別構成や質問紙に回答する条件が今回の対象と異なるため、改めて全項目 (32項目) の因子分析を行った。その結果、もとの因子分析と同じように3因子で最適解を得た。ただし、因子負荷量を.4以上に限定したことによる1項目 (除外された項目は、「豊かな人生を送っていると思うようになった」) と第1因子と第3因子の2つの因子に.4前後の同程度の因子負荷量を示した1項目 (「自分中心でなくなった」) が除外された。あらためて30項目で因子分析を実施した結果は、表5に掲載した通りであり、第1因子には、「つながりを大切にするようになった」、「考え方が柔軟になった」、「自分に対して肯定的になった」など18項目が、第2因子は「非常に恐れるようになった」、「死ぬときになって人は完成する」など6項目、第3因子には「自分中心でなくなった」、「忍耐強くなった」な

表5 死別経験による人格発達項目（渡邊ら、2005）の本研究対象での因子分析の結果

質 問 項 目	I	II	III	共通性
Q10 私は、つらいことや悲しいことを乗り越えていける強さをもった。	.765	-.013	.055	.588
Q 8 私は、忍耐強くなった。	.717	.004	.050	.517
Q 6 私は、考え方が柔軟になった。	.705	-.060	.064	.505
Q 4 私は、他人の喜びを自分の喜びとすることができるようになった。	.679	.085	.097	.477
Q17 私は、人生の実相がわかるようになった。	.659	-.142	.006	.454
Q11 私は、以前とは違う新たな視点で今までの自分の生活を振り返ることができるようになった。	.650	.068	.325	.532
Q 9 私は、他人の悲しみを自分の悲しみとすることができるようになった。	.645	.013	.151	.438
Q 2 私は、人とのつながりを大切にできるようになった。	.632	.164	.166	.453
Q12 私は、他人の価値観を受け入れることができるようになった。	.606	.098	.210	.421
Q 3 私は、どのような人にもその人なりの良さが感じられるようになった。	.598	.033	.104	.369
Q 7 私は、ひとりひとりがかけがえのない存在だと思うようになった。	.573	.197	.197	.405
Q14 私は、一日一日を大切に生きようと思うようになった。	.537	.010	.161	.315
Q 5 私は、自分の中に好まない面を見つけたら、隠すよりも良くしていこうと思うようになった。	.513	-.123	-.148	.301
Q18 私は、自分本位の考えや行動をしなくなった。	.487	.173	.255	.332
Q 1 私は、プラス思考で物事を考えられるようになった。	.479	-.124	-.176	.276
Q16 私は、自分に対して肯定的になった。	.478	.243	.248	.348
Q20 私は、物事にあまり動じなくなった。	.460	.076	.311	.314
Q13 私は、長幼の序は大切だと思うようになった。	.448	.190	.287	.319
Q23 私は 死を非常に恐れるようになった。*	.098	.822	.451	.888
Q24 私は、人が亡くなると、自分の死について考えさせられるのが嫌だと思うようになった。*	-.018	.816	.295	.753
Q25 私は、死は恐ろしいのであまり考えないようにになった。*	-.018	.816	.295	.753
Q26 私は 自分の死についてよく考えるようになった。	.085	.781	.121	.631
Q22 私は、死についての考えが思い浮かんでくると、いつもそれをはねのけようとするようになった。*	.089	.763	.162	.617
Q21 私は、死について考えることを避けるようになった。*	.006	.650	.093	.432
Q28 私は 家族や友人と死についてよく話すようになった。	.043	.459	.691	.690
Q27 私は 死とは何だろうとよく考えるようになった。	-.003	.408	.667	.612
Q30 私は 死はその人の人生観が試されるときであると思うようになった。	.165	.031	.645	.444
Q32 私は 死ぬときになって人は完成するものだと思うようになった。	.280	.383	.596	.580
Q31 私は 身近な人の死についてよく考えるようになった。	.183	.036	.535	.321
Q29 私は 死について考えることは人を成長させると思うようになった。	.080	.000	.533	.290
因子寄与	6.613	4.422	3.343	14.379
因子寄与率（％）	22.04	14.74	11.14	47.93

*は逆転項目(逆転採点后)
プロマックス回転後

因子間相関

	I	II	III
I	1.000	.053	.181
II	.053	1.000	.363
III	.181	.363	1.000

ど6項目が該当した。渡邊ら(2005)と比較すると、最初の因子分析で除かれた第1因子の2項目以外の差異は、第2因子の「自分の死についてよく考えるようになった」が第3因子から移動した1項目のみの変化にとどまった。因子名については、もとの研究と大きな違いは認められなかったため同じ名称とした。すなわち、第1因子は、「自己感覚の拡大」に関する因子、第2因子は、「死への恐怖の克服」に関する因子、第3因子は「死への関心・死の意味」に関する因子である。

今回の因子分析の結果は大きな違いはなかったが、一部変化した原因にはいずれも再度の因子分析を実施した理由と関係している。二つの理由が考えられ、ひとつは対象が女子大学生であり年齢と性の違い(もとの研究では男女とも含まれ、30歳代から60歳以上で後者が64%を占めた)が影響した可能性がある。このように対象が若年層であり死別経験者が少なかったため、重要なペットとの死別経験を含めることにしたとともに、死別経験のないものには「重要な他者との死別経験を想定して」回答を依頼し、死別経験のないものも資料に含まれたことが二つ目の理由である。

つぎに死別経験を重要な他者と可愛がっていた動物の両者との死別経験を有するもの、重要な他者との死別経験を有するもの、動物との死別経験を有するものおよび両者ともに死別経験を有しないものの4タイプに分け、一元配置の分散分析を実施した。なお、死別経験を有するものを前提に質問紙が構成されているため、今回は他者と動物とともに死別経験をもっていない場合は、方法で述べたように重要な他者との死別経験を想定して各質問に回答するように要請した。

合計得点と第1因子の「自己感覚の拡大」、第3因子の「死への関心・死の意

味」の2つの因子で、有意差が確認された(合計得点 $-F=3.36, df=3/136, p<.05$; 第1因子 $-F=2.71, df=3/136, p<.05$; 第3因子 $-F=2.20, df=1/136, p<.05$)。これら3尺度の各群の平均値は、重要な他者と動物の両者との死別経験を有するものと死別経験を有しないものが、いずれか一方との死別経験を有するものより高くなっており、下位検定の結果、3尺度とも両者の死別経験群と人のみの死別経験群の間に統計的な差異が確認された。

各質問項目ごとの比較では、「私は、他人の喜びを自分の喜びとすることができるようになった(Q4)」、「私は、家族や友人と死についてよく話すようになった(Q28)」、「私は、死ぬときになって人は完成するものだと思うようになった(Q32)」の3項目で有意差がみられた。また、「私は、プラス思考で物事を考えられるようになった(Q1)」、「私は、他人の悲しみを自分の悲しみとすることができるようになった(Q9)」、「私は、長幼の序は大切だと思うようになった(Q13)」、「私は、一日一日を大切に生きようと思うようになった(Q14)」など8項目で傾向が認められた。全体としては合計と因子別の得点と同じような方向性を示していたが、Q14は死別経験の種類数により高くなり、Q28は両者の死別経験者のみが高くなっていた。有意差ないしは有意な傾向のあった合計得点、因子ごと、項目ごとの平均値と標準偏差は表6に示した。

人および動物の死別経験者と死別経験がなかったものが、いずれかの死別を経験したものに比べて高くなったという今回の結果には、つぎのような背景が影響した可能性が推測される。すなわち、本来は死別経験を有する対象への質問項目を対象を全体にするために死別経験のないものには、「重要な他者との死別経験を想定して回答する」ように教示

表6 死別経験による人格発達の平均得点と標準偏差
（各因子と統計的に有意差ないし傾向のあったもの）

		平均	S D	4 群間比較	3 群間比較*
発達合計					
	死別経験なし	106.72	11.49	p<.05	p<.05
	動物との死別経験あり	101.50	12.47		
	他者との死別経験あり	99.77	11.36		
	他者と動物との死別経験あり	107.11	12.83		
第 1 因子 自己感覚の拡大					
	死別経験なし	70.76	8.27	p<.05	p<.05
	動物との死別経験あり	67.23	9.89		
	他者との死別経験あり	66.09	9.07		
	他者と動物との死別経験あり	71.07	9.41		
第 2 因子 死への恐怖の克服					
	死別経験なし	14.97	3.62		
	動物との死別経験あり	14.27	2.88		
	他者との死別経験あり	14.37	3.57		
	他者と動物との死別経験あり	14.72	3.10		
第 3 因子 死への関心・死の意味					
	死別経験なし	21.00	4.19	p<.05	p<.05
	動物との死別経験あり	20.00	3.96		
	他者との死別経験あり	19.31	3.64		
	他者と動物との死別経験あり	21.31	3.74		
Q 1 私は、プラス思考で物事を考えられるようになった。					
	死別経験なし	3.10	0.94	p<.10	
	動物との死別経験あり	2.64	0.85		
	他者との死別経験あり	2.66	1.06		
	他者と動物との死別経験あり	2.91	0.90		
Q 2 私は、人とのつながりを大切にするようになった。					
	死別経験なし	4.10	0.77	p<.10	
	動物との死別経験あり	3.59	0.73		
	他者との死別経験あり	3.89	1.08		
	他者と動物との死別経験あり	4.04	0.95		
Q 4 私は、他人の喜びを自分の喜びとすることができるようになった。					
	死別経験なし	4.00	0.89	p<.05	p<.10
	動物との死別経験あり	3.55	0.80		
	他者との死別経験あり	3.54	0.82		
	他者と動物との死別経験あり	3.81	0.73		
Q 9 私は、他人の悲しみを自分の悲しみとすることができるようになった。					
	死別経験なし	3.90	0.77	p<.10	p<.10
	動物との死別経験あり	3.41	0.91		
	他者との死別経験あり	3.63	0.77		
	他者と動物との死別経験あり	3.83	0.80		

Q11 私は、以前とは違う新たな視点で今までの自分の生活を振り返ることができるようになった。					
	死別経験なし	3.59	0.82		p<.05
	動物との死別経験あり	3.32	0.78		
	他者との死別経験あり	3.23	0.77		
	他者と動物との死別経験あり	3.61	0.81		
Q13 私は、長幼の序は大切だと思うようになった。					
	死別経験なし	3.83	0.71	p<.05	p<.05
	動物との死別経験あり	3.59	0.67		
	他者との死別経験あり	3.63	0.81		
	他者と動物との死別経験あり	3.96	0.85		
Q14 私は、一日一日を大切に生きようと思うようになった。					
	死別経験なし	3.45	1.09	p<.10	p<.10
	動物との死別経験あり	3.55	0.91		
	他者との死別経験あり	3.63	1.00		
	他者と動物との死別経験あり	3.96	0.87		
Q17 私は、人生の実相がわかるようになった。					
	死別経験なし	3.28	0.65	p<.10	
	動物との死別経験あり	3.00	0.76		
	他者との死別経験あり	2.91	0.82		
	他者と動物との死別経験あり	3.19	0.75		
Q18 私は、自分本位の考えや行動をしなくなった。					
	死別経験なし	3.00	0.71	p<.10	
	動物との死別経験あり	2.77	0.87		
	他者との死別経験あり	2.63	0.84		
	他者と動物との死別経験あり	2.91	0.62		
Q20 私は、物事にあまり動じなくなった。					
	死別経験なし	3.14	0.79		p<.10
	動物との死別経験あり	2.95	0.84		
	他者との死別経験あり	2.91	0.66		
	他者と動物との死別経験あり	3.22	0.72		
Q28 私は 家族や友人と死についてよく話すようになった。					
	死別経験なし	3.07	1.03	p<.05	p<.05
	動物との死別経験あり	3.00	1.02		
	他者との死別経験あり	3.03	0.98		
	他者と動物との死別経験あり	3.48	1.02		
Q32 私は 死ぬときになって人は完成するものだと思うようになった。					
	死別経験なし	3.52	0.91	p<.05	p<.01
	動物との死別経験あり	3.00	0.87		
	他者との死別経験あり	3.26	1.04		
	他者と動物との死別経験あり	3.67	0.91		

* - 3 群間比較は、死別経験なしを除く 3 群間の比較を意味する。

に記した。あらためて死別を想像するという経験は、死を直視することで意識が活性化し「生」の再考や「死」の意味の問い直しの機会につながり、「人格発達の合計得点」と「自己感覚の拡大」、「死への関心・死の意味」の2つの因子得点と8項目で高くなったということである。丹下(1995)は、高校生と大学生を対象とした質問紙調査研究で、死に関する思索は、死生観尺度の7つの因子のなかの生き続けたさからの解放や死との接触の肯定に作用する可能性を明らかにしており、今回の結果との整合性をうかがわせた。また、前原ら(2008)は本調査と同様の死別経験による人格的発達尺度を用い、「死にまつわる情報での感動経験(テレビ、映画、小説など)」のあるものはないものに比べ人格発達得点が高いことを明らかにし、実体験としての死別でなくても人格発達に影響するとした。

上述のように死別経験のないものは、死別を想定しての回答であったためこれらのものを除き、実際の死別経験のあった3群間であらためて比較検討した。同じく分散分析の結果、合体得点と第1因子の「自己感覚の拡大」、第3因子の「死への関心・死の意味」の2つの因子で、有意差が確認された(それぞれ、 $F=4.03, df=2/108, p<.05$; $F=3.17, df=2/108$; $F=3.65, df=2/108, p<.05$)。いずれも、人と動物の両者の死別経験をした群が最も高くなっており、人ないしは動物の一方しか経験していないものの間の差はほとんど認められなかった。質問項目ごとに検討したところ、「私は、以前とは違う新たな視点で今までの自分の生活を振り返ることができるようになった(Q11)」、「私は、家族や友人と死についてよく話すようになった(Q28)」、「私は、死ぬときになって人は完成するものだと思うようになった(Q32)」など4項目(他にQ13)で有意差、「私は、他人の悲しみを自分の悲し

みとすることができるようになった(Q9)」、「私は、一日一日を大切に生きようと思うようになった(Q14)」、「私は、物事にあまり動じなくなった(Q20)」など4項目(他にQ4)で有意な傾向が認められた。平均値での比較では「私は、忍耐強くなった(Q8)」と「私は、死について考えることは人を成長させると思うようになった(Q29)」の2項目を除いて全体と同じような方向性、すなわち人か動物かの死別ではわずかの差が差がほとんどなく、いずれもの死別の経験をもつものが最も高くなっているという方向性が確認された。

今回、死別経験者では、他者とペットの両者の経験者が最も高かったが、対象が重要な他者と動物の間には統計的な差が認められず、むしろ平均値で見ると動物のみの群の方がわずかではあるが高かった。換言すれば、ペットも重要な他者と同じ程度影響しているということになる。筆者の死に対する意識や感情について実施した調査では、重要な他者よりむしろ身近な動物との間の死別経験の方が、一貫して影響が強くなっていた(増田, 2011)。特に子ども期は、ペットの場合、より身近で親密で直接的な関わりが多く、主体的に生命に関わっていたことが、関係しているのかもしれない。幼児を対象とした研究でペットロス経験や身近な人との死別は、死の概念の非可逆性の理解(濱野, 2008; Kane, 1979)に関連し、両親は責任感、共感性発達や情操教育などの機会と考え、親密性が高いほど人格的に発達すると捉えているという(濱野, 2007)。

子どもに限らず、近年ペットを失うことによる一連の心理的な症状や身体的な症状をとるペットロス症候群が、検討されるようになってきている(濱野, 2008; 得丸ら, 2010など)。木村(2009)の「『たかが動物の

死』という意味が他人だけでなく、自分自身もとまどわせてしまう。そのように対象喪失による悲嘆を事実として承認することに抵抗があると、悲嘆の作業が正常に進まないと推測される」(p.359)という指摘にもあるように、家族との死別と同じ心理状態(得丸ら, 2010)であり、人間の死と同様に受け入れがたいもので理性だけで解決できるほど単純ではなく(西宮, 1997)、死別後は親しい人物との死別と同様の悲嘆の回復過程と同じような経過をたどるという(木村, 2009)。

ここでの死別経験者間の比較で、人と動物の両方で経験をもつものが、合計得点と2つの因子および10項目で人格的な発達を確認できた。死別条件の比較の設定対象は異なるが、過去に死別による人格発達を認めた渡邊ら(2005)や坂口(2002)等の研究と同様の方向性を示した。前者の渡邊は、死別経験のないものへは3年前の自分と比較するという条件で行い、死別経験の方が人格的発達得点が高くなっていた。

ここで差異が確認された第1因子の「自己感覚の拡大」と第3因子の「死への関心・死の意味」は、大切な人や動物との死別経験を重ねることにより発達するのかもしれない。末松(2008)も自然観との関連での研究で、「自己感覚の拡大」において人格的発達を明らかにしている。

また、前原ら(2008)は、死別経験の有無の効果を認めることはできなかったが、共感性の高い人間が死に関する経験後に正の変化をしていたと報告している。本研究でも、項目ごとにみると全体の方向性と同様の有意差か傾向が認められた8項目のなかで、「他者の喜びを自分の喜びにできる(Q4)」や「他者の悲しみを自分の悲しみにできる(Q9)」など3項目が、共感性に関連していた。また、東村ら(2001)は死別による人間的成長

の7つのカテゴリーをあげており、今回人格的発達が認められた8項目は、そのいずれかに該当(複数も含め)していた。特にそれらのカテゴリーのなかの「人間関係の再認識」や「人生哲学の獲得」に該当するものが多く、前者では「私は、長幼の序は大切だと思うようになった(Q13)」など4項目(他にQ4, Q9, Q28)が、後者では「私は、死ぬときになって人は完成するものだと思うようになった(Q32)」など3項目(他にQ11, Q20)が当てはまっていた。

今回は死の認知については調査していないが、死別を意味あるものであったという肯定的態度で、その後の生活に対する関わり方が主体的であるという認知タイプは、人格的発達得点が高いという結果が得られており(渡邊, 2004)、死別を認知レベルでどのように捉えるかによって、影響が異なる可能性が高い。また、死別による人格的発達は、調査対象および死別対象の年齢、性や続柄、死別からの期間、同居・別居の区別、関わり方の度合いなどさまざまな要素が関係するとともに、パーソナリティなどが関与するので統制することは難しい研究領域であると考えられる。今後は、序論でも述べたように突然の死別は、身体的・心理的負担が大きという報告もあることから、死別の状況・条件の側面や死別の認知的な側面についても考慮する必要がある。

要 約

東日本大震災の4ヶ月後に女子大学生を対象として、震災による死の身近さ、死の不安、死別経験による人格的発達などを質問紙調査を実施した。約7割が身近に感じ、身近であるか否かと死別経験によって「死の不安」尺度得点を比較したところ、予測と異なり総合得点と2つの因子を中心に身近さは死の不安

とは反対の関係にあった。死別経験の影響については、第2因子でのみで効果が現れ死の不安が低くなっていた。

人格的発達に関して、もとの質問紙を因子分析したところ、2つの項目が除外された以外はほぼ同様の3因子が認められた。死別経験との関係を分析したところ、教示の影響の可能性もあり、死別経験のないものと重要な他者と親密な動物の両者の死別経験のあるもので同程度の人格的発達がみられ、2つの因子やいくつかの項目でいずれか一方の死別に比べ高くなっていた。死別経験者のみに限定しての分析では、両者の死別経験者の人格的発達が他より高くなっており、動物との死別は他者との死別と同程度の効果をもった。

引用文献

- 愛知県防災危機管理課 2012 平成23年度防災(地震)に関する意識調査結果のあらまし
- Bonanno, G.A. 2009 The other side of sadness: What the new science of bereavement tells us about life after loss. New York: Basic Books.
- Bowlby, J., & Parkes 1970 Separation and loss within the family. In E.J. Anthony (Eds.), The child in his family, 197-216. New York: Wiley.
- Demi A. 1978 Adjustment to widowhood after a sudden death: Suicide and nonsuicide survivors compared. Community Nursing Research. 11, 91-99.
- デーケン, A. 1986 悲嘆のプロセス: 残された家族のケアデーケン(編著) 死を看取る メディカルフレンド社 255-274.
- 濱野佐代子 2007 コンパニオンアニマルが人に与える影響-愛着と喪失を中心に-, 博士論文 白百合女子大学
- 濱野佐代子 2008 幼児の動物の死の概念と、ペットロス経験後の生命観の変化に関する研究-幼児の死の概念とペットロス経験の関連 発達研究 発達科学研究教育センター 22, 23-36.
- 東村奈緒美・坂口幸弘・柏木哲夫・恒藤暁 2001 死別経験による遺族の人間的成長 死の臨床, 24, 69-74.
- 糸島陽子 2005 死生観形成に関する調査-看護学生と大学生の比較- 京都市立看護短期大学紀要 30, 141-147.
- Kane, B. 1979 Children's concepts of death. Journal of Genetic Psychology, 134, 141-153.
- 金児暁嗣 1994 大学生とその両親の死の不安と死観 大阪市立大学文学部紀要, 46, 10, 1-28.
- 狩谷恭子・渡會丹和子 2011 看護大学生における死生観と死に対するイメージの学年比較 医療保健学研究 2, 107-116.
- 木村祐哉 2009 ペットロスに伴う悲嘆反応とその支援のあり方 心身医学 49, 5, 357-362.
- Kubler-Ross, E. 1969 On death and dying. New York: Macmillan. 川口正吉(訳) 1971 死ぬ瞬間: 死にゆく人々との対話 読売新聞社
- Lehman DR, Wortman CB, Williams AF 1987 Long-term effects of losing a spouse or child in a motor vehicle crash, Journal of Personality and Social Psychology 51, 218-231
- 前原佳奈 橘川真彦 2008 大学生の死に関する経験による人格的発達-共感性・死に対する態度の視点から- 宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要 31, 293-300.
- 増田公男 2011 女子大学生における死の意識に関する調査 金城学院大学論集 人文科学編7, 2, 93-101.
- 松下千夏 2009 青年期の死の不安と死生観: 高齢者との比較から 龍谷大学大学院文学研究科紀要 31, 103-123.
- 松下姫歌・尾方綾 2008 青年期における死の不安と「死」・「生」・「自己」のイメージ: DASとSD法を用いて 広島大学心理学研究 7, 325-337.
- 松下姫歌・尾方綾 2009 死別体験と「死」のイメージおよび死への態度との関連 広島大学大学院教育学研究科紀要 第三部 58, 159-168.
- Miyabayashi, S., & Yasuda J. 2007 Effects of loss from suicide, accidents, acute illness and chronic illness on bereaved spouses and parents in Japan: their general health, depressive mood, and grief reaction. Psychiatry Clinical Neurosciences. 61, 5, 502-508.
- 宮林幸江・安田 仁 2008 死因の相違が遺族の健康・抑うつ・悲嘆反応に及ぼす影響 日本公衛誌 55, 3, 139-146.
- 村上 信・佐藤真由美・宮下栄子・濱野 強・藤澤

- 由和 2012 社会福祉士養成の学部教育における学生の死生観に関する意識調査 淑徳大学研究紀要(総合福祉学部・コミュニティ政策学部) 46, 87-94.
- 西宮三代 1997 ペット・ロス 誠文堂新光社
- 尾方 綾・岡本祐子 2012 死別経験の有無および死に対する態度と「死」のイメージとの関連 広島大学心理学研究 12, 155-168.
- 大和田攝子 2000 死別における死の形態の役割 大阪大学臨床老年医学行動学年報 5, 3-10
- Pollak, J. M. 1980 Correlates of death anxiety. A review pf empirical studies. *Omega:Journal of death and dying*, 10, 97- 121.
- Range,L. & Niss,N. 1990 Long-term bereavement from suicide, Homocide, accidents and natural deaths. *Death Studies*, 14, 423-433.
- 坂口幸弘 2002 死別後の心理的プロセスにおける意味の役割：有益性発見に関する検討 73, 3, 275-280.
- 坂口幸弘 2010 悲嘆学入門－死別の悲しみを学ぶ－ 昭和堂
- Shanfield,S.B.,Swain,D.J., & Benjamin,G.A.H. 1987 Parents' reactions to the death of an adult childrenfrom accidents and cancer:A Comparison. *Omega*, 17,4,289-297.
- 末松弥歩 2008 死別による人格的発達と自然観の関連 生老病死の行動科学 大阪大学 大学院人間科学研究科臨床死生学研究室 13, 15-23.
- 丹下智香子 1995 死生観の展開 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学) 42, 149-156.
- Templer, D. I. 1970 The construction and validation of a Death Anxiety Scale. *Journal of General Psychology*, 82, 165-177.
- 得丸定子 2006 日本の大学生における死と死後の不安 日本家政会誌 57,6,411-419.
- 得丸定子 佐藤英恵 郷堀ヨゼフ 2010 人生観によるペットロス, ペット葬の関係について 上越教育大学研究紀要 29,257-268.
- 渡邊照美 2004 死別経験者の死別に対する認知と関連要因の検討 広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部 53,411-420.
- 渡邊照美 岡本祐子 2005 死別経験による人格的発達とケア体験との関連 発達心理学研究 16, 3, 247-256.